

論文概要の和文様式

雑誌におけるタイトル: Nausea and vomiting during pregnancy associated with lower incidence of preterm births: the Japan Environment and Children's Study

和文タイトル: つわりの程度と早産リスクの関連性について: 子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)より

ユニットセンター(UC)等名: 高知UC

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: BMC Pregnancy and Childbirth

年: 2018 月: 7 巻: 18 頁: 268

筆頭著者名: 満田 直美

所属UC名: 高知UC

目的:

つわりの機序には不明な点が多いが、つわり症状が強いことは、より良いホルモン環境を反映しており、児の予後が良好であるということを示唆するとも言われている。本研究の目的はエコチル調査の全固定データを用いて、つわり症状の強かった妊婦で早産となるリスクが低下しているかどうかについて明らかにすることである。

方法:

予測因子をつわりの程度・有無、アウトカムを早産とした。在胎週数を37週未満と37週以降に分け二値変数としアウトカム変数とし、多変量解析を行い、交絡因子を調整した上でつわりの程度と早産リスクに関連があるかを検討した。次に、在胎週数を32週未満と32週以降に分け二値変数とし、同様に多変量解析を行い、つわりの程度と32週未満の早産リスクに関連があるかを検討した。

結果:

対象となった96,506人のうち、79,460(82.7%)人がつわりを経験していた。つわりを経験しなかった人は、年齢が高い群、初産婦、教育歴が高い群、BMIが低い群、妊娠中に喫煙をしていた群により多い傾向が見られた。何らかのつわり症状を妊娠初期に経験していた妊婦は、つわり症状を経験しなかった妊婦に比べて37週未満の早産、32週未満の早産となるリスクがともに低下しておりその傾向は32週未満の早産でより顕著であった。さらに、これらの早産リスクはより強いつわり症状を経験した妊婦で低下していた。

考察:(研究の限界を含める)

過去のつわりと早産の関連性についての研究では一定の見解は得られていないが本研究からはノルウェーの出生コホート調査を用いて行われた研究の結果と類似するものであった。過去の研究ではサンプルサイズやつわり症状の定義や分類の違いによって異なる結果が得られている可能性も考えられる。この研究の強みはサンプルサイズが大きいことであり、様々な交絡因子による調整を行うことができた。一方、研究の限界として、つわり症状の程度は確認できているがその頻度や持続期間についての情報が得られていないこと、26週未満の症例ではつわり症状についての質問票調査を行う前に出産に至っている可能性が高いこと、などが挙げられる。

結論:

つわりの症状と早産リスクには関連があり、つわり症状が強いほど早産リスクが低下しており、とくに32週未満の早産リスクが低下していた。つわり症状に影響を与える内分泌因子や胎盤因子についての研究が今後待たれるところである。